

『女性に関する十二章』はなぜベストセラーになったのか

——「婦人公論」からみる伊藤整の女性論——

森 田 沙 央 理

はじめに

伊藤整は、一九〇五年北海道出身の小説家、評論家、文芸史家である。新心理主義的な小説や評論を発表し、ジェイムズ・ジョイスを中心とする新心理主義文学の唱道者として注目され、長編小説『鳴海仙吉』や評論『小説の方法』などを精力的に発表する。一九五〇年にはロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』を翻訳、刊行したが、猥褻文書の容疑で検察庁に押収され、「チャタレイ裁判」が起る。伊藤整は裁判のかたわら、『伊藤整氏の生活と意見』（一九五二年）や『女性に関する十二章』（一九五三年）、『火の鳥』（一九五三年）などを発表、それらがヒットし、「伊藤整ブーム」なるものが起こる。中でも『女性に関する十二章』は、発行直後二十万部以上も売り捌きブームの中においても特に売上げた作品であった。――

『女性に関する十二章』は一九五三年一月から同年十二月まで、雑誌『婦人公論』において連載し、一九五四年二月に新書版として中央公論社より出版された、伊藤整によるエッセイである。連載時、毎回内容に基づいたタイトルを設け、新書版では全十二章として発

表された。女性の今日の結婚観やファッションから触れ始め、男女恋愛論に発展していき、正義や愛といった抽象的な方向へと深めていき、最終的には社会における人間のあり方、生き方にまで行き着く、伊藤整の考えがよく反映された作品である。このエッセイが書かれる経緯について、伊藤整は、一九五四年九月一日発行の雑誌『中央公論』第六十九年第九号掲載された「私の実験工場と製品」二というエッセイの中で述べている。それは伊藤整が『伊藤整氏の生活と意見』を、雑誌『新潮』に一九五一年から一年半に渡って連載していたときのこと、その中に女性をヒヤカすような文章を書いたのを雑誌『婦人公論』の編集者がその部分呼んで面白いと思い、伊藤整に連載を依頼したのである。伊藤整はそれまで女性論を論じたことがなかったもので、少し考え込んだが、「女性の悪口を書きましよう。長年の女性への復讐のチャンスが来ましたね」と言つてその編集者と笑ひあつたという。『女性に関する十二章』の中では、チャタレイ裁判の被告人であつたことも、動機のひとつであつたと伊藤整は述べている。恋愛の中の一行動である男女の性の交わりに思想的な意味を見出した訳者である自分は、女性に対して教える常識や思

想を多く持っているだろうと編集者に思われたからであるということだが、このように、執筆した動機は、伊藤整が自発的にではなく、まわりから女性論を書いてほしいと進められたからである。さらに、この『女性に関する十二章』が伊藤整にとつてははじめての女性論であったということになる。そのはじめての女性論が発行直後に二十万部以上を売り捌いたのである。一九五六年一月『文芸春秋』第三十四巻第一号『我が文学生活Ⅳ』に収録されている「わがブーム始末記」^三では、「私のような『純文学』という範囲内で仕事をして来た文士の本は、たいてい千部から三千部ぐらい印刷されるのが常である」、「昭和二十九年の三月に出した『女性に関する十二章』は、現在までの二十ヶ月間に、三十二万部印刷した」と、過去の作品よりも明らかに大幅な売り上げをみせるこのエッセイと、それに対して驚きをみせる伊藤整の姿が伝わってくる。『火の鳥』『女性に関する十二章』『文学入門』といったものは「わがブーム始末記」によれば、どれも発行部数が十万部を超えている。これらが「伊藤整ブーム」といえる売り上げを誇った作品だが、それまでの彼の作品の売り上げが千部から三千部なのに対し、これら作品はどうして大幅な売り上げをみせたのであろうか。その中でも特に顕著な売り上げをみせた『女性に関する十二章』に絞って、なぜこの作品がブームに至ったのかを考察してみたいと思う。

『女性に関する十二章』を連載していた「婦人公論」において、山本健吉氏は^四、Aという人物から、『女性に関する十二章』が「婦人公論」の雑誌の「読者をはつきり二分した」ということを、聞いたことがある^五ののだという。二分したとは、どのような図であるのかというと、一方は清水幾太郎の巻頭論文を喜び、伊藤整へ抗議の投書

をよこすという読者、もう一方はその逆で、伊藤整の文書を喜び、清水幾太郎の論文なんて読まないという読者である。清水幾太郎とは社会学者、思想家、評論家であり、既成のいっさいの「社会学」をブルジョア科学として批判し、マルクス主義の「社会科学」との対立点を明らかにした人物である^五。山本氏の意見としては、『女性に関する十二章』を「感傷性のみじんもないエッセイ」であると評し、婦人雑誌に載るようになったことを「たいへん喜ばしい現象である」と述べ、好印象に思っており、『女性に関する十二章』とほかの女性論を比較して、これまでの女性論は「聴き手たちをうつとりした境地にさそうことができるもの」だったのに対し、この作品は「もし女性の部屋で語られたら、女性たちから吊し上げにされかねまじい表現に充ちている」と、対照的な印象を述べている。具体的には、どのような点において違いがあったのだろうか。その違いがベストセラーに関わるのではないかと考え、「婦人公論」における『女性に関する十二章』が連載された前後の一九五二年から一九五四年に絞って、『女性に関する十二章』と、「婦人公論」に掲載された女性に関する評論との比較を試みた。女性に関する評論は、『女性に関する十二章』で特に扱った、男女の恋愛や結婚について言及されているものに絞って考察していきたいと思う。

本論

「婦人公論」は一九一六年に中央公論社より創刊された総合雑誌である^六。この頃は、第一次世界大戦の真最中であり、近代思想がさかんに輸入され、新思想に見出された若者達が、個人の解放や因

襲の打破をめざして、「明治時代の封建的な古さから逃れよう」とあえていた」時代であった。女性に注目すると、一九一一年九月、松井須磨子がノラを演じる『人形の家』が上演され、平塚らいてうは青鞥社を組織し、「青鞥」を刊行する。女性の解放と自我の確立が主張されるという時代であった。時代の要請により誕生したのが、「婦人公論」である。自由主義を掲げ女権拡張を目指して誕生した「婦人公論」であったが、中尾香氏によると、「婦人公論」は、女性の権利拡張をめざすも、「家庭」を基底としていたという。中尾氏は次のように述べている。

「婦人公論」が「隷属的地位に戻ることを、すなわち封建的な女性のあり方を否定する一方で、「家庭」という基盤を忘れがち」になつてしまうこと、すなわち、ゆきすぎた解放、にたいしても否定的であつたことが述べられている。そして、結局は「家庭にある妻の解放」あるいは家庭を重視した上での女性の解放が志向されてきたことが、強調されているのだ。

このような方針があつたので、対象とした一九五二年から一九五四年の間だけでも、「家庭」を取り扱った内容がメインに据えられることが多かった。その中でも多かったのが夫婦の関係や結婚問題である。『女性に関する十二章』もこのテーマがベースとしてあつたと思うので、基本的には「婦人公論」の方針に添った内容であつた。一九五二年三月号では「結婚の幸福」と題した特集が組まれており、目玉となっている。「結婚を考える」という座談会が掲載されている。座談会では、結婚は幸福への道か、という問いに対して、女性ほど

うしても結婚を自分の生涯の目的にしてしまい、世間的にもそれが当たり前であつた、女性は結婚に対して夢を持ちすぎていると四人は答えている。「結婚すれば幸福になれる」、「結婚を重大視しすぎている」、というのが、この頃の女性の結婚観であつたようだ。また、そのように考えなければいけないような社会であつた。座談会メンバーのひとり、坂西志保は、女性が社会進出を目指している一方で男性が女性には妻として家庭に居て家事に専念してほしいという要求を非常に強く持っているということ、女性も、結婚が当たり前という時代だから、結婚をしていないと世間の目が冷たいということを指摘している。当時は女性にとって、独身では居づらい状況であつたことがわかる。そして、このように女性が結婚に対して生涯をかけた夢を持っている、という指摘は『女性に関する十二章』の中でも持ち上げられていたことである。「第一章 結婚と幸福」において「結婚病」は長年の流行病であり、人類は、一度はこの病氣にかかつてしまふ、結婚しなければならぬ、そうしないと気が落ち着かない、というのが一般の人間性である、と伊藤整は述べている。そのような世の中で、男性は女性のことをどのよう思っていたのだろうか。座談会の話題は「妻の価値」に移る。坂西は、家事をこなしている妻に対して、夫は「非常に便利だ」と思っている、と指摘している。座談会メンバー、池田繁は、妻は外だけでなく家庭でも働いているのだということを夫は考えなければいけない、と夫側に対して厳しい見方を示す。最後に男女の倦怠期をどのように乗り越えるか、これからの男女交際について、の話題になるが、男の人は天性は一夫多妻主義で、女性は一夫一婦を理想としていることを指摘し、座談会メンバー、獅子文六は、「いまの若い日本の女の人は

ちが愛情のためにそういう男性の過失を許すというところまでは、まだ将来がありますね」と述べ、坂西も、女性が男性を許す、という感情がでてきたのは女性の経済的独立ができるようになってからであると述べる。このように、男性と女性の恋愛における本質的な違いは、『女性に関する十二章』においても指摘されている。第三章の「哀れるなる男性」においては、男性は本来浮気性であるといつて、座談会で出た一夫多妻主義と似たようなことを伊藤整は述べている。しかし、さきほどの座談会と違う点がそのあとに、以下のように述べられている。

自分の中のこのような残酷な本能に気のついてる男性は、その自己の性を怖れ、恥じ、困惑し、実に閉口するのです。男性は、この本能を自己の罪であると感じて、寸時も心の安まる時のない、哀れる存在なのです。

もし、ある女性が、その夫や愛人が自己に貞操を守ってくれることを理解した時、彼女は、その男性に相当強い感謝と理解を示すべきだと私は思います。男性、それは実に抑止しがたい性の力に追いかけていて、苛責を負える、苦しめる、罪の意識に悩める哀れる存在であることを、世の常の女性は知らずにいて、ウチノヒトはアタシを愛していない、などと単純に考えがちです。

違うというのは、座談会の方では女性が男性を「許す」ということだったのに対し、伊藤整は女性が男性に「感謝するべき」とであると

述べている点である。男性の浮気性はしかたがない、本能なのだから、とここまでは考えは一緒であったが、異なるのは女性側よりも男性側に味方をしているような印象を与えていることである。浮気性を殺しても貞操を守ってくれる男性に女性は感謝するべきだと、伊藤整は女性に論じているような印象を与える。この点が、『女性に関する十二章』の特殊な点ではないだろうか。さらに「婦人公論」を読み進めたいと思う。

同じく三月号に掲載されている黒豹介の「女房学校入学心得―妹へ―」は、嫁ぎゆく妹に対して贈る言葉を載せているが、夫とは何かといつて、「人間の牡にして、女房の飼育する動物なり」と答えている。女房が夫を飼育する、というたとえ方は、妻が上で夫が下、という上下関係を連想させる。妻の立場になる女性に対して、「まず、人間の牡たる彼の清濁を併せ呑むことを第一にすゝめる」と述べている点は、さきほどの座談会と同様、妻が夫を「許す」立場であることを前提として考えられている。黒は肉親に対して贈っている言葉であるから、女性である妹の方に味方しているという点も考慮されるが、妻が夫にハツパをかければ、夫は馬車馬のように働くだろうという考えや、夫がスナック等の呑み屋で呑んで帰って来たとしても、妻は受け入れて欲しい、という考えは、女性側に立ち、女性側に味方している考え方のように思える。福島慶子の「古女房の論し方」においても、男女の結婚は、結婚したらそれで終りというわけではなく、そのあとが大変であると論じている。夫は妻が外で稼ぐことをよしとは思っておらず、それは嫁には養われたくないという男のプライドがあるからである、と福島は述べる。どんな貧しい男でも、女の力を借りるのは恥じであると考え、妻に絶対の服従を

強い、妻を働きに出させなかった。このことを福島は、「日本男子の実力がなくても威張りたがる癖」であると述べている。日本が戦争に負けたことにより、日本女子は参政権を得、家族制度も破られ、夫に同様の口がきけるようになった。日本女子の自由を得、自分らしく生活できる始まりである。一方男子は、「給料は上がらずインフレは酷く、お嫁さんをもらっても昔のように威張って食べさせる自身も怪しくなってしまった」と福島は述べる。それでも現在のところでは、妻は全面的に夫によって生活を保護され、夫のお陰で暮らしている状態であるから、妻は浮気されても我慢し、反論ができないのであるという。福島はこの文章により、当時の夫婦関係の事情が思い浮かぶ。

古谷綱武の文章も、同じく三月号に掲載されている。「人形教室の女性たち」では、日本の伝統の美しさを称えている一方で、家庭においては女性が男性の犠牲になっているということを述べている。

純日本風な家庭をながめていると（略）すべて、「一家の主人」と呼ばれている夫であり、父である男だけを中心にくらしというものがつくられていて、そのくらしをさへえているものは、犠牲と奉仕とに生きるだけを女のたゞひとつの幸福かのように教えこまれた婦人の忍耐が、その家庭の団欒や平和をさへえているように見えてしかたがないのである。

このように、古谷は、男性本位の生活の中で女性は犠牲と奉仕とに生き、そうすることによって、一家の団欒は保たれてきたと述べており、女性は男性の犠牲となっている被害者であり、彼女らに味方

した視点である。以上のように一九五二年三月号においては、夫婦関係をテーマとした評論が多く載っていたが、いずれも女性側を最良、味方し、男性には厳しいという考えが目立ち、男性側に味方または優位に立てて論じられたものはほとんどなかったという印象を受ける。

八月号では、先月号から連載している生島遼一の『新恋愛論』について、生島はボーヴォワールの『第二の性』を持ち出している。『第二の性』といえ、一九五三年度にベストセラーとして第二位についた作品である。生島はこの作品をなかなか面白い女性論であると評し、「男のしてきた、現にしているわがまま、男が女に対してはたらいた「悪」を反省させるという意味で大へん参考になる」本であると述べている。やはり生島にも男性側が反省をする立場であると認識しているのだろうか。男性に対して、次のように述べている。

女の苦しみを男はとかく《女の運命》とか《自然現象》としてしまうことが多い。たとえば出産の苦痛といったことでも多くの男は女が宿命としてうけねばならぬことのように考えている。瞬時の享楽の代償として女は九ヶ月の苦しみを負わねばならぬことを男性は真面目に反省したことがあるだろうか。

以上、生島は、男性の一時の享楽のために女性が犠牲になっていると、男性に対して厳しい見方を示している。なお、『第二の性』では結婚についてのボーヴォワールの見解も述べられており、『女性に関する十二章』然り、一九五〇年代からの当時の社会は、結婚問題に

関心があつたのではないか、という見方も考えられる。とにかく、生島が女性を被害者であるとし、男性に反省を促していることが、この論からは読み取れる。

九月号で取り上げるのは、生島遼一の『新恋愛論』第三回目である。第三回目は、女性の結婚に対する強迫観念について述べている。婚期を控えた若い女性は、結婚を強迫観念に感じており、結婚できなければ『売のこり』になって人生の敗残者になる」という不安を抱き、一方では、結婚してしまふと「娘時代の自由なひろびろとした生活がいつおわるかもしれないといったコンプレックス」を抱いていると生島は述べている。妻の立場にある女性は、夫の奴隷のように扱われる立場を不満に思っており、それと付き合ひながら、いかにして夫婦関係を維持するのか、はたまた離婚してしまおうか、という問題を抱えている一方で、独身の、特に若い女性は結婚願望が非常に強く、むしろ強迫観念を抱かせるほど社会も女性に結婚の義務を持たせていた、という当時の結婚事情が浮かび上がってくる。女性が結婚に対して、そのような観念を持つている一方で、男性の、女性に求める理想の結婚相手像についても紹介されており、最近では若い女性が事務や研究にたずさわっているという社会になってきたが、男の学生を例に出し、彼らは優秀な成績で卒業した某女性を噂して、ああいう人とは結婚したくない、と話していたという。彼らの理想的な女性は、「研究に専心する女性などは敬遠し、頭の悪くて、もつと個性のない、おとなしい、家庭的な、十人並の器量をもつ雑誌の口絵の明朗な娘さんである」、「(男性は女性に)自由な精神とか大胆さとか反抗心とか仕事にもつ熱意といった個性的な性格をもとめていることはまずない」という傾向があると生島は分析して

いる。そうであるとしたら、女性がこれからどんな社会進出をしていきたいと願ひ、行動力に移していて、家庭においても自由を求めて、「教養によつて自由や個性が尊いものであることをおしえられた現代の娘達は、せめて結婚生活の枠の内でもそういうものを与えてくれ、幾分は保証してくれそうな配偶者をえらばうと」している一方で、男性はそのような女性を結婚相手にはしたくないと思つているのだから、男性と女性の間で価値観が相違していることがわかる。だからこの時代には、男女間の恋愛、結婚問題が何かと取り沙汰されていたのかもしれない。生島は夫婦間をうまくいかにせるには、夫婦間で「相手の自由な個性を認めあい、妻の夫への献身的サーヴィス」という伝統的公式をやぶるのに比例して、われわれの結婚生活に新しい、明るい展望がひらかれるにちがいない」と述べている。この考え方は、『女性に関する十二章』においても観られたものである。

一九五三年一月号からついに、伊藤整の『女性に関する十二章』が連載開始される。五月号では、読者の意見が掲載される「婦人のひろば」というコーナーにおいて、『女性に関する十二章』の感想が寄せられている。

女性に主観のみで情緒的に物を見る傾向がある。いわば自己中心なのである。この私の気持に拍車をかけたのが、伊藤整氏の『女性に関する十二章』である。回を追うに従つて、チャタレイ事件の対象としての興味でのもんでいた私も、その文章の皮肉な面白さに心惹かれずにいられないようになって来た。

そこには皮相な見方を据えた、自由奔放な客観性が窺われるか

らである。思わず苦笑させ、洒落なユーモアを交えて読者をひきつける。「ハハア、こんな見方もあるのか」とハツツとさせられる。そして生きている面白味を感じさせられる。何故といって、「じゃ私も一度実験してみよう」という勇気をおこさせるような皮肉さがあるかららしい。一步自分を抜け出して自分を見つめることは楽しいことにちがいない。

(京都・城居 佑子)

以上のように、『女性に関する十二章』に対して好感を持った意見が載せられていた。チャタレイ裁判が興味を持つきっかけであったが、この女性には内容自体に興味を持つようになり、心惹かれるようになったことがわかる。「チャタレイ裁判の伊藤整」でまず認識されたとしても、『女性に関する十二章』の内容自体に魅力があったから面白く読んでいるという読者がいたこと、「売れた原因は、チャタレイ裁判が直接のきっかけではない」という伊藤整の言葉がよぎる。チャタレイ裁判で名が知れたおかでもあった、編集者の工夫した宣伝のおかげでもあった、しかし、何よりも内容に新鮮味があり、読者をひきつける魅力があったからこそ、『女性に関する十二章』が売れたのではないだろうか。「婦人のひろば」では、そのほかにも読者の積極的な意見がいくつか載せられていた。その中で、男性からの意見も寄せられている。「婦人公論」について、「婦人公論」は「企業する雑誌として、女性の優しい感情にアピールするあたりを限界とした問題の処理をするのが賢明なる使命なのか」と疑問を提示している。女性に夢を見させるような印象操作をしているから、愛読している自分の妹はそれを信じて楽しそうに未来を描いていると批判

している。女性ばかりの意見が占める「婦人のひろば」に男性の意見が載ることは面白い。

七月号では、清水幾太郎が「夫人と平和」という題の文章を載せている。清水は東京で開かれた日本婦人大会を傍聴し、日本婦人が強くなったことを実感している。「日本社会の矛盾が鋭くよせられて来た婦人たちが、その肩の重荷を振り払い、撥ね返して、これを社会全体の問題として解決することを要求し始めてゐる」と参加した婦人たちをみて、清水はこのように述べている。

八月号においても注目すべきは、清水幾太郎の「主婦について」である。清水が石川県内灘へ出かけ、内灘視察団の派遣に、一員として同行したときの話である。現地の会合に出たとき、貧困で家事に追いまくられている主婦層の出席に感謝の気持でいっぱいになった清水は、「よく来て下さった」と主婦らに敬意を表する。同じ会場に來ている学生や一般男性らに比べると、この主婦たちは実に大きな無理をして、大変な犠牲を払って会場に來ているということを清水は主張する。主婦は「日本の現実の提出する問題を、正面から、直接に、身をもって引き受けてゐる不幸な人たちなのです」と清水は述べ、「決して日本の主婦たちを絶望させてはならない」と決心する。このように清水幾太郎は、女性が置かれている現状に対して詳細に知っているからなのかもしれないが、非常に女性を敬い、女性に味方する人物という印象を与える。その一方で「女性は不幸である」と述べ、同情的である。伊藤整の、皮肉を込めて女性たちを容赦なく突き放すような口調とは逆である。伊藤整は清水幾太郎よりも女性に同情的ではない。むしろ男性に同情してみせるのは先ほども紹介した通りである。伊藤整と清水幾太郎、両者の違いが表れて

きたようである。

一二月号において、『女性に関する十二章』はついに連載を終える。一九五四年度に入っていきたいと思う。この年は『女性に関する十二章』が刊行された年である。一月号の「婦人のひろば」においては、男性への不満をこぼす女性の意見が目についた。依然男性が主体である社会において、女性は男性の奴隷として生きなければならぬのかといった、女性達の怒りや不満が並べられた。それまで男性と女性に上下関係が伝統としてあったものが、戦後の女性の権力向上によって、男女平等の世の中を本格的に出發したばかりの当時は、このように男女の権利、関係において、せめぎ合い、落ち着かない状態であったのではないだろうか。

二月号の「婦人のひろば」では、「婦人公論」を非常に愛読している女性と、「婦人公論」に掲載された文章に対して批判する男性の意見が、対照的に寄せられた。愛読している女性は、「婦人公論」が教科書的な存在であり、「婦人公論」ほど素晴らしい雑誌はないと主張している。一方の、男性による批判の意見は次のように述べられている。

十一月号本欄の「男教師の低俗さ」と題する伊藤先生の文を拝読して、少々もの申上げます。(略)私も現在教師という職を持つ者の一人として、一言申し上げたくります。貴女がおつしやられるように、狭いとはいえ、広い国の中の何処かに低俗な教師(男ばかりではないでしょうが)が或いはいるに違いありません。が、一体、純粋そのものの子供達を相手に、職場に限りなき生甲斐をもっている私達が、どうすればそんなに淫猥に

なれるでしょうか。(略)
(長野県・加藤 静生)

「男教師の低俗さ」という文章には、男教師は低俗である、と決め付けられていたために、意見を寄せた男性は、自分たちの職業意識を貶されたように感じ憤りを見せているという様子がわかる。どうすればそんなに淫猥になれるでしょうか」という部分から、男教師が性的な面で低俗であると「男教師の低俗さ」の中では述べられていたのかもしれない。少なくともひとりの男性を怒らせた内容であるということはわかる。さきほどもあった、男性による批判意見があったが、「婦人公論」は、女性ばかりに味方し、良いことを言つて、男性には厳しく、むしろ敵対視しているという印象を与える。

四月号においては、「ブック・ガイド」という、本を紹介するコーナーで『女性に関する十二章』が取り上げられており、河盛好蔵という人物が文章を書いている。河盛は、冒頭に『女性に関する十二章』が女性にとっては辛い本であるということを述べている。伊藤整はいやがらせをしているのではないかとさえ書いてある。どの部分が「いやがらせ」に感じるのかは例としてさきほども挙げた、「愛しているのではなく情緒である」という考え、「男性が生来浮気性であり、妻にしか性の衝動を感じないという男性は偽善者である」という考え、「男性は貞潔であるために、非常に大きな努力を強いている」という考えである。河盛はこの作品を男性が読めば伊藤整に対して親近感を抱き、自分一人ではないと胸をなでおろすし、女性が読めば、いまいまいけけれども、その通りであると溜息をつく、と述べている。男性と女性とでは印象が異なるということである。

つまり著者は人間であるかぎり男も女も生きてゆく上に、とくに夫婦生活をいとなむ上に生じるさまざまな苦勞や摩擦を正直に告白することによって、苦しんでいるのは女ばかりではないことを、少しばかり大げさに、もしくは身勝手に述べているのである。これを読んで男に同情する必要は少しもないが、浅はかな女にならないだけの心構えはできるだろう。

この本は男性のエゴイズムについていると解説をしたり、弁明をしたりして男性の味方になっていくように見えるが、よく読んでみると、男のずるい手くだを一々解き明しているような本である。まさに男性の敵である。教養のある頭のいい女性がそれを見抜かない筈がない。これが「婦人公論」に連載されているときに熱狂的な歓迎を受けた理由である。なるほどこれが本当のフェミニストというものであるかと思つた。

以上により、河盛は、『女性に関する十二章』は一見男性の味方であるかのようだが、その実男のずるい手くだを解き明した、男性にとつては敵になる内容である、と述べている。「敵」と河盛は指摘するが、その端々で「苦しんでいるのは女ばかりではない」、「男に同情する」、「男性の味方になっていく」という言葉があり、男性の視点からは、そのような印象を持たれるような内容なのではないか、ともいえる。「本当のフェミニスト」という部分は、『女性に関する十二章』がそれまでの「フェミニスト」とは違った印象を与えているという意味を含んでいるのならば、個人的には同意する意見

である。清水幾太郎ら、先ほどすでに例を挙げた女性論と比較し、伊藤整は女性に対して最良をする姿勢を見せない。また、感傷的ではない。女性雑誌に連載しながらも、女性とはある程度距離を置いて、男性の視点も織り交ぜた、客観的な論を展開している。先ほど挙げた「読者のひろば」に寄せられた『女性に関する十二章』を読んでいて、客観的な語り口が面白いと評する女性読者もいたように、そのような客観性が新鮮さを与える女性論であると思う。

七月号は注目すべき号である。『女性に関する十二章』の抗議」と題された特集が目次にある。抗議文を寄せたのは、石垣綾子、茂木照子、徳丸時恵の、三人の女性である。「身勝手な男のセリフ」と題した石垣綾子の抗議について。石垣は、男性は浮気性に悩まされる哀れな存在であるという伊藤整の考え方に対して、一般的な男性は別に罪の意識なんて持つてはいない、「哀れな男が尻尾をまいて、女性に同情を求めることは、よしていただきましょう」と切り捨てている。その哀れな本能を専売特許にして不貞をはたらく男に対して、どうして女性は感謝しなければならぬのか、石垣は疑問を持っている。

一般の男性はマツカーサー元帥のように、経済力も権力もないし、伊藤先生のように性に對して、深刻な罪の意識を持つておりません。

男の性的な本能が「積極的で、撒布的で多面的」とであるというのは、長い歴史の間、男が支配者として、自由奔放にふるまってきた結果であります。男の悩みも苦しみも、因果応報ではないでしょうか。とすれば、哀れな男性に、その妻や愛人が、彼

等の悩みや苦しみに、感謝し、同情するのはおかしいではありませんか。

「積極的、多面的、撒布的な本能」を、男の専売特許にし、据え膳に手をつけないのは男の恥で、チャンスさえあれば、その本能をふるう男の不貞に、現代の女性には抗議します。

このように、石垣は述べているが、石垣が不満に思う点は、やはり女性が、苦しい思いで貞操を貫こうと努力する男性に対して感謝する、という部分であるようだ。そのほかにも、女として平凡に生きる处世術をさずけようとしている点や、女をおだて、まつりあげていながら、結局は「男というものはと、居すわって、その男を満足させる」こと「心の中では、女を軽蔑して、男の思うつぽに、女を制御しておこう」という考え、「女に消極的な諦めをあたえ、その限界の中で、幸福を求めるような生きかた」を推奨することといったことが、男性側を最良し女性を馬鹿にしているように思え、石垣は憤りをみせたのではないだろうか。

次の抗議は、茂木照子の「女性牽制の書」である。茂木照子も、石垣綾子と同様に、『女性に関する十二章』は男性の意気を軒昂とさせると述べ、その実例を挙げている。

すでに私の危惧した男性族の意気軒昂の実例はあがっています。十返肇氏は『時事新報』に『女性に関する十二章』に男性としてソウダソウダと共感の拍手を送り、さらに『週間朝日』はこの本から派生した全女性に捧ぐ「男性に関する十二章」を掲載

し、先生初め当代一流の文筆陣を動員して、男とはザツとこの通り、驚いたか、という厚顔無恥オン・パレード振り。知性のピークである評論家が丸となって「男は多情で好色スケベイ（何とイヤらしき語感）で歎的だ」と広告している壮観さよ。男性の本質をワザとクローズ・アップし、自ら扇動し、挑発し、一種のヒロイズムを構成する。これを女性の恫喝と見なくて何なのでしょ。

この『女性に関する十二章』は、男性からには共感を得られて、男性も女性に負けじと「男性に関する十二章」を書いて対抗を示していたことがわかる。したがって『女性に関する十二章』は女性だけではなく、男性にも注目されていたといえる。伊藤整も、「私の実験工場と製品」において、『女性に関する十二章』は、勤労生活をしている女性、独身の女性、女学生からは不満を持たれ、既婚女性は賛否両論であり、男性は殆ど全部が支持をしていると述べている。

三人目の徳丸時恵は、「浮気を前提の男心」と題した抗議文を寄せている。徳丸も石垣や茂木と同様『女性に関する十二章』は、男性側を最良し、女性にはよく思わない内容であるという印象をもっているようである。

伊藤整氏の『女性に関する十二章』は男心を抉ったものとしていろんな意味の反響を呼んだ。いわば、おんな心をつかみ、ひきずりまわし、喜ばせても見る、あらゆる技術を知り尽くした男心を御披露に及んでいられる。（略）しかし、そこではあまりにも男性の側のみの、執拗なほどの希望、女性へのやむにやま

れぬ願望が語られており、せまられており、女性の方が胸苦しいほどの圧迫を感じないであろうか。

徳丸の意見をみると、伊藤整は、男性から女性にあれこれしてほしいという要望を、『女性に関する十二章』で書いている、ということになる。先ほども挙げた、男性に女性に感謝するべきである、という考えの他には、『女性に関する十二章』において、次のようなものもある。

旦那様から見ても、女性たちの魅力と欠点は五十歩百歩なのです。「正直に言えば、どんな女も五十歩百歩という男性のあきらめが、妻のバカバカしいヒステリイを我慢させている場合が多いようだ」と、このようにもし、私が書いたら、どうでしょう。(略) 妻に満足している男は一人もない、という形勢がそこに生まれること、男性にはほとんど皆覚えのあることです。

(第五章 五十歩と百歩)

このように、伊藤整は、妻が夫に不満を抱くのと同じで、夫も妻には満足していないことを述べている。男性の本音を包み隠さず書き、女性読者に衝撃を与えてしまう内容が、彼女らに不快感を与えたのかもしれない。

三人の抗議のあとには、伊藤整自身が「抗議にこたへて」と題した文を寄せている。伊藤整は三人の女性からの抗議文を読んだあとにこの文章を書いたようで、三人の猛烈な批判に対して、そのような指摘もつともであると柔軟に対応している。『女性に関する十二

章』が、多分に男性の身勝手な考え方を反映しているということ、編集担当の京谷秀夫と、女性への復讐だといって笑ったことなどを、ここでも述べている。しかし、注目するのはそのあとである。女性たちからの批判を受けて、男性からの視点をもって、意見している。

ただ私の氣にしたことは、自分だけが正しく生き、正しいことをしてあれば、男性は自分を愛し、いたはってくれる、と一人で思ひ込むための不幸になる女の人が相当にあるのではないかと、いふことでした。さういふ、正しいが故に不幸になりがちな人に対して、多少の弾力性のある考へ方、男性は案外淋しがりやで、妻や愛人にもっと構ってもらひたがってゐるものだ、といふことを理解してもらはうとしたのが、私にあのやうな文章を書かせたのだった、と私は今思ひ出します。

女性に対してあくまでも距離を置いて、男性として客観的に女性を分析している伊藤整の姿勢が窺える。かといつて、女性に対して冷たいわけではなく、男性を最悪しているわけでもない。むしろ女性のために『女性に関する十二章』は書かれたと思うのである。しかし、女性一辺倒にはならず、男性の視点をも織り交ぜ、男性の気持ちを代弁しているのが、『女性に関する十二章』の特徴、伊藤整の面白い点である。

私は、家庭の主人は女性であるべきで、女性は育児といふ重い負担を持つてゐるので、家庭の財産、家庭の支配権といふべき

ものは女性に（出来れば法律的に）帰属すべきものだ、と考へてあます。

男性が家庭で欲するのは、自由といふことです。男性にもっと自由を与えた方がよい、と私は考へます。（略）性的に男性を縛ることが自分の生活を安全にするのだ、といふ衝動を女性が多く持つのではないかと私は思ひます。

このように、女性の人権を尊重しつつも男性の気持も主張している。こういった視点が、当時の風潮では新鮮なものだったのかもしれない。

七月号は『女性に関する十二章』に対する女性からの抗議、それに答える伊藤整の言葉が掲載されたこと、こういった企画がされるほど当時の反響は大きかったということなのではないだろうか。その証拠に、続く九月号には「独身に関する十二章」、一〇月号には「映画の観方に関する十二章」が掲載されている。一二月号には、広告に『新聞の読み方に関する十二章』の刊行が宣伝されている。このように、「くに関する十二章」という題名は、『女性に関する十二章』の影響を受けている。また同じく二月号には、映画『女性に関する十二章』のシナリオが掲載されている。映画化されるほど、『女性に関する十二章』の反響は大きいものであったことが窺える。

ここまで、一九五二年から一九五四年までの「婦人公論」をみてきたが、『女性に関する十二章』と「婦人公論」に掲載された女性論を比較して、『女性に関する十二章』は、女性に感傷的ではなく、男性の視点を取り入れ、ある程度距離を置いた客観的な内容であると

いう印象を受けた。同情的な言葉で女性を誘うのではなく、少々の毒気を含んだ軽快な語り口で、女性と適度に距離を置く。一九五二年の「婦人公論」では、女性は男性の被害者であり、男性は女性に反省をすべきだという内容が多く見られたのに対して、『女性に関する十二章』は、男性にとっても、女性によつて束縛を感じている、男性だつて浮気心を抑えて貞潔を守ろうと努力はしている、と男性側の気持を代弁してくれているかのような告白をしている。このような内容が掲載されたのは当時において、新鮮だったのではないだろうか。当時の男性側からの支持や反響、女性からの批判が企画されたりにしている点でもそうであるといえる。山本健吉氏が聞いたという、『女性に関する十二章』が、「婦人公論」の読者をはつきりと二分したというのは、そのような点に要因があつたのかもしれない。また、それがブームにつながった一つの要因ではないだろうか。

今後の展望

『女性に関する十二章』と、「婦人公論」に掲載された女性論と比較し、どのような点で違いがあるのかを考察したが、その際一九五二年から一九五四年に限定した。しかし、これだけの範囲では十分に断定することができない。それよりも前、戦後直ぐから検討する必要があると思うので、今後それらの範囲を含め、改めて考察してみたいと思う。また、『女性に関する十二章』に触発され、誕生したという「男性に関する十二章」や、十返肇の評価についても実際に読んでみて、男性が『女性に関する十二章』に対して、具体的にどのような感想をもったのかも考察してみたい、今後の課題である。

- 一 小田切進『日本近代文学大事典』（講談社、一九九七年一月）
- 二 伊藤整『伊藤整全集 第十七卷』（新潮社、一九七三年七月）
- 三 注二に同じ
- 四 山本健吉『伊藤整氏の女性観』（知性社編「知性」一卷五号、一九五四年十二月）
- 五 注一に同じ
- 六 注一に同じ
- 七 松田ふみ子『婦人公論の五十年』（中央公論社、一九六五年一〇月）
- 八 中尾香『〈進歩的主婦〉を生きた戦後『婦人公論』のエスノグラフィ』（作品社、二〇〇九年三月）
- 九 注七に同じ